

對鏡欲相親 鏡に対して相親しまんとす

半面分明見 半面分明に見ゆ

雙眉斗頓頰 雙眉斗頓に頰む

此愁何以故 此の愁へ 何を以ての故ぞ

照得白毛新 白毛新なることを照すこと得ればなり

自疑鏡浮翳 自ら疑ふらくは 鏡に翳を浮かぶるか

再三拭去塵 再三 塵を拭ひ去れば

塵消光更信 塵消えて 光更に信かなり

知不失其眞 知りぬ 其の眞を失はざること

(下略)

(傍線 筆者)

この詩は道真が讃岐の国守として赴任中に詠んだもので、鏡に今の自分の容姿を写したところ、白髪が生えてきた愁人の己れの姿が明らかになったという主旨のものである。ここで道真自身が鏡に己の姿を写すという意味合いを押さえておく必要がある。すでに川口久雄氏が頭注で指摘している(注三) ように「鏡は将来の吉凶を照らすもの、思うところを自照すればやがてあらわれる。又鏡は毛筋ほどの微細なことや病気のことまでも照らし出すと考えられていた」との認識は、『藝文類聚』「服飾部下・鏡」の項に載せられている『抱朴子』中の「或問知將來將來吉凶爲有道乎。答曰、用明鏡九寸自照、有所思存。七日則見神仙、知千里外事也」の内容が道真を始めとする当時の漢詩人に享受されていたことの証となる。故にこの「254 對鏡」の三句目「我が心忘む所無し」だから四句目「鏡に対して相親しまんとす」の句が生まれるのである。換言すれば、己れに忘む所があれば鏡か